

月報 岡崎の教育



1月号

平成5年1月1日

発行 / 編集

岡崎市教育委員会

ぶさいくな僕
かつこ悪い僕
でも
僕は、そんな僕が気に入ってる
だつて、君が心を込めて
作ってくれてるじゃないか

がんばれ
自分の足で立つんだ
声援が指先から伝わる
君は、あたたかい手を
そつと、離した

今度こそ立つんだ
僕は渾身の力を込めた
僕にいのちが生まれる
この一瞬

君の微笑が、目の前に広がる
僕と君が一体になる
僕たちにとつて、すてきな一瞬

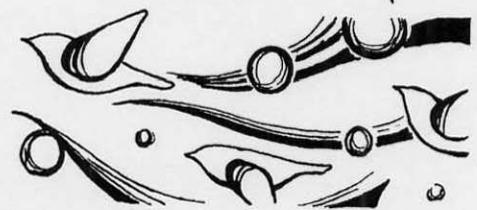
（ねん土）



(もちつき大会 一 羽根小)

ふるさとシリーズ

この人に聞く



川柳

会田

規世児 氏

規世児

ご利益は平稳無事なありがたさ
年のはじめにちなんど、まず一句披露

さられた。
岡崎川柳研究社の主幹である會田さん
が川柳を始めたのは、十八歳の時か
らとお聞きました。

高等科一年で登校拒否になり、何かを
勉強しなくてはとの思いで胸がいっぱい
であった時、岡崎の川柳の草分けである
稻吉佳晶さんに誘われたのがきっかけで
あつたそうである。

「短詩に興味を持たせてくれたのは、五、
六年の担任の矢野先生です。教室に投

句箱が設けてあり、先生が選句された
ので、それに選んでもらいたくて、頑
張って書いたものです。今は九十を超
えられた矢野先生には、とても感謝を
しています。」

と、その頃を懐かしんで言われた。

始められた頃の句会は十五人くらいだ
ったが、今は、生涯学習で川柳も盛んだと
のこと。南部市民センターで月に一度開
かれている講座は、講師の會田さんの人
柄でもう三年も続いているそうである。

三十年余も熱心に続けてこられた川柳
の魅力についてお尋ねした。

「人間を詠むということですね。私は、
街ずっと立つていても飽きませんよ。

いろいろな物が目に入ってきますから。
川柳の教えは自分を書けということで、
個性が出ます。他人の句と同じ句とい
うのはできません。」

ここで、自信の作を二句披露された。
指切りの子の目に嘘は隠されず
貧しさを言えば素直な子に返る

四十代で既に選者になられ、今では東
海三県の各地から句会に招かれて行かれ
るそうである。選者の目を惹きつける句
を作るには、ものごとの裏を回つて見る
ことも多いという。人は、會田さんを評
して「駄々っ子がそのまま大きくなつた」
野良犬の臭覚を持つている」と言うと笑
つて話された。會田さんの句が人を惹き
つけるのは、常に新鮮な感覚を持ち続け
る努力をしてみえるからであろう。

「川柳は一人でもできるところに強さが
あります。」



義兄より電話があり、「会つてくれるよ」とのこと。早速連絡したところ、三月一日朴庵例会があるので、その時どうぞと御了承をいただいた。

二月二十九日（土）、道後温泉に泊る。

次の日の朝、宝嚴寺を訪れ、捨聖一遍上人のお像に接する。この寺は一遍上人の生まれた所である。上人の生き方を私が生き方とする先生が、何故この近くの地に住まわれているかわかる気がした。

先生のお宅を十時頃訪問する。玄関左手に朴の木があり、六メートルほどになっていた。御多忙の中時間を割いていただき、三十分ほど先生とお話しすることができた。宝嚴寺を訪れて来たことをお話をしたら、「第一番真玄碑を見ててくれましたか」と尋ねられ、見逃してしまったことを悔まれた。十一時半より、開花亭朴庵

での朴庵例会に出席する。この朴庵は、先生を慕う開花亭経営者が先生のために贈られた庵で、三十名くらいしか入れない。当時は八十名ほどの出席者がおり、半数以上は隣室でマイクを通して講話を聞いてみえた。先生の講話は、禅語「紅炉上一

点の雪」についての教えであった。諄々と論すように説く話を聞いて、私もいつの日か、雪のよう自由自在な無の心境になりたいものだと願つた。一時間半の講話を終え、隣室での懇談会に出席したが、わざわざ三人を紹介していただいた。

心洗われる充実した旅であった。

その後、先生から贈つていただいたのがこの色紙である。

住 所 羽根町小豆坂五十七一一
生年月日 昭和六年八月十二日

氏 名 あいだ きよじ

坂の多い町・岡崎



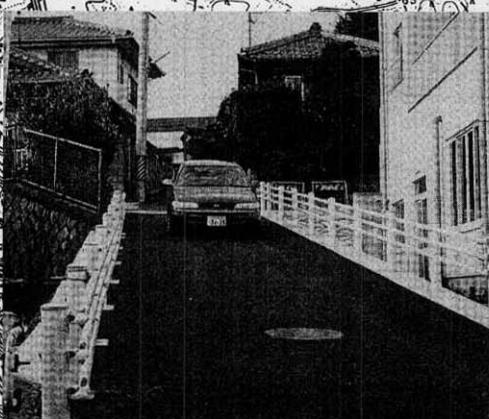
▲①【努力坂】一明大寺町一
学校へ通う坂、すなわち学問を修める心得の言葉として
伝えられてきた。

努力坂



▲②【六地蔵坂】一六地蔵町一
上り口に六地蔵が安置され、それが地
名となり、坂名となつた。

六地蔵坂



▲④【茶臼坂】一六供町一
地名が坂の名となつたが、この周辺は住宅地として開
発が進んでいる。



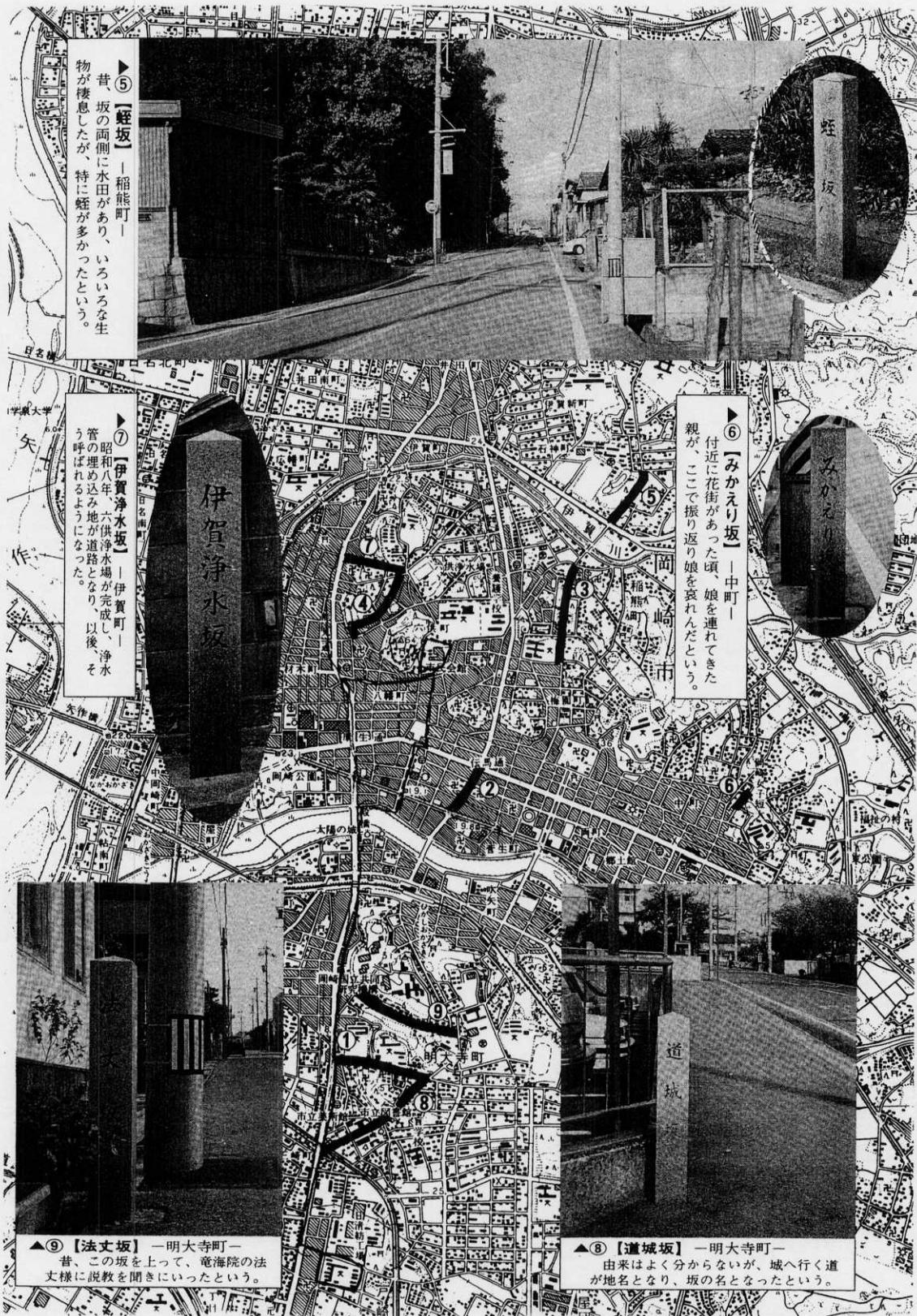
▲③【沢蟹坂】一稻熊町一
少し前までは、道の傍らの山地から清水が流れ、
沢蟹がたくさんいたという。

努力坂

「岡崎」という地名は、地勢から付けられたというのが一般的な解釈である。三河高原の末端は、市街の北東部に緩やかに連なりながら南西に向けて傾斜し、甲山を始めとする北部丘陵地帯を形成する。また、乙川南の明大寺付近の南部丘陵地帯は、南東部の宝飯山地へと続く。

このように、岡崎は起伏があつて、丘と坂の多いことを特徴とする町である。昔から、住人は坂のある暮らしに慣れ親しんできた。市観光課では、昭和五十八年、名のある坂四十八箇所を確認し、うち十箇所に坂名を記した石柱を建てた。

このように、岡崎は起伏があつて、丘と坂の多いことを特徴とする町である。昔から、住人は坂のある暮らしに慣れ親しんできた。





心のハーモニー

新香山中 内田 義和

「明日、K男君の家へ行つて合唱コンクールの歌『川』を聴かせてあげたいと思います。たくさん的人と一緒にきてくれるとうれしいんですが」

文化祭を一週間後にひかえた土曜日の帰りの会で、E美がこんな提案をした。

「先生、もう行つてもいいんですか。」

「そうなんだなあ。昨日、またみんなが遊びに来たがつてることつて言つてくれたんだよ。」

K男は、一年の二学期から学

校に来づらくなり、二年では二日登校したが、三年では今とのところ一日も登校していない。そんなふうだからクラスの中には彼の顔さえ知らない者が多い。

四月から、週に一、二度の家庭訪問が続いた。学級の生徒からも、訪問や手紙や電話などK男に対するはたらきかけは様々だ。男は、担任や毎日のように訪れるA男や、ときどき遊びに行くB男やB男など面識のある人は明るく何のこだわりもなく応対するが、不特定の生徒に対しでは受け入れることができぬ状態が続いていた。

そんな中、二学期に入つてから彼の気持ちに変化が表れた。進路の話にも耳を傾けるようになってきたし、ついに面識のない級友の訪問も嫌がらなくなつた。この機会をとらえて今回の訪問が実行されることになった。

「天正の少年使節」に取り組んで

ローマ日本人学校 岡田 要

ローマ日本人学校に赴任しては家の前だった。野外コンサートといえばかっこいいが、無伴奏だったので、生徒たちはかなり苦労して「川」を歌い上げた。

K男も熱心に聴き、感想まで言

うことができた。こうして級友との初めての心の交流が実現した。

残念ながら文化祭当日もK男の姿は学校にはなかつた。だが、彼からメッセージが届いた。

「心から応援しています」と。

この言葉を胸に合唱コンクールに臨んだ生徒たちは、歌い終えたとき、体育館が心のハーモニーに応えるようにエコーを返してくれたのを聴き取っていた。

六年生の担任になつたことを契機に、社会科の歴史学習を通して「国際社会に生きる資質を養う」ことに取り組んでみた。

ローマの地域性、資料の豊富なこと、発展性などを考え「天正の少年使節」を題材にした。

四月から、社会科の時間と学級の時間を使い「天正の少年使節」の本を読み、一人調べをして、ローマ市内の少年使節のゆかりの地を訪れた。

特に、少年使節らがローマ滞在中の宿舎としていたジエズ教会（イエズス会の母教会）を見学し、少年使節の使つていた部屋で、神父さんから少年使節たちの生活ぶりを聞いたことは、生きた追体験となつた。I男は見学記録に「四百年の時をこえて少年使節たちと話し合えた気

年生の中で最高になる」ことを約束した。

私は、日本人学校の使命は国内と同等の教育を行うことと海外をすることもけつして容易ではないが、何もないところから

外を生かした教育をすることだ

と思っている。国内と同等の教育をすることがけつして容易ではないが、何もないところから

海外を生かした教育に取り組めないことに焦りさえ感じていた。

六年生の担任になつたことを契機に、社会科の歴史学習を通して「国際社会に生きる資質を養う」ことに取り組んでみた。

ローマの地域性、資料の豊富なこと、発展性などを考え「天正

の少年使節」を題材にした。

四月から、社会科の時間と学

級の時間を使い「天正の少年使節」の本を読み、一人調べをして、ローマ市内の少年使節のゆかりの地を訪れた。

特に、少年使節らがローマ滞



究として取り組み、U男はペネチアの古文書館にある少年使節が送った手紙を見せてもらいに行っている。

九月で一応学習は終えたが、

H男は「同じ日本人として誇りに思うようになった」と感想を書いている。十一月の学習発表会では、「天正の少年使節」を劇化して発表した。四人の熱演に客席から惜しみない拍手がおられた。

この原稿を書き終えた時、読売新聞社の作文コンクールに応募していた四人の共同作品「天正の少年使節の学習」が海外部

門の優秀賞を受けたという朗報が届いた。Y子が「これで最高の六年生にまた一步近づけたかな」とうれしそうに言つた。

Y子が「これまで最高の六年生にまた一步近づけたかな」とうれしそうに言つた。

Y子が「これまで最高の六年生にまた一步近づけたかな」とうれしそうに言つた。

夏休み中も、それぞれ自由研



◆第四十二回西三河中学校長距
離継走大会

- ・男子の部 優勝 東海中
- ・二位 矢作北中
- ・三位 竜海中

- ・女子の部 優勝 矢作北中
- ・二位 竜海中
- ・三位 竜海中

◆第二十九回海外経済協力強調

- 三島小 鈴木 忍教諭

運動感想文入賞

第二十回教育文賞授賞式が去る十一月二十一日に行われ、次の方々が受賞の栄に輝いた。

(個人)

▼原田康二氏（七十六歳）

五十年前から同市東公園の野鳥観察を始め、西三河野鳥の会の会長を務め、「探鳥ガイド西三河」の出版や機関紙の発行など、野鳥観察の普及や自然保護に尽力する。

▼九鬼憲子氏（五十八歳）

「手をつなぐ親の会」の会長を務め、通所更生施設、授産施設などの建設を市に要望、促進のため「青竹募金」や廃品回収事業を展開するなど、障害児を持つ家庭を親身に支援し続ける。

(団体)

▼葵中学校生徒会

一九四七年の開校以来、伊賀

◆恵田小に博報賞文部大臣奨励賞

同校は、十四年間にわたる県立岡崎麗学校との交流活動が認められ、特殊教育部門で第二十三回博報賞を受賞する。

◆三島小に発達科学研究教育奨励賞

同校の「社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を目指して」の実践研究が認められ、(財)発達科学研究教育センターより特別活動部門で同賞を受賞する。

◆東海三県中学校英語弁論大會

四位 葵 中三年 毛利容子

五位 矢作中三年 山本奈緒

六位 葵 中三年 杉山勝昭

七位 矢作中三年 沢井純子

八位 矢作中三年 天野雄介

九位 矢作中三年 沢井純子

ト入賞

矢作北中 三年 浜石華乃子

矢作中 三年 山本奈緒

葵 中 三年 沢井純子

ト入賞

矢作北中 三年 浜石華乃子

矢作中 三年 山本奈緒

葵 中 三年 沢井純子

ト入賞

矢作北中 三年 浜石華乃子

矢作中 三年 山本奈緒

葵 中 三年 沢井純子

◆綠丘小六年藤沢友美子

・特選(描画の部)
上地小一年太田和宏

羽根小四年川尻敦子

藤川小一年岸加奈子

根石小一年廣川利哉

矢作南小一年齊藤正幸

矢作東小六年川浪聖子

常磐中一年大類志野

竜海中三年天野雄介

六ノ美北中二年河合美紀

六ノ美北中二年鶴田やよい

竜海中二年天野雄介

六ノ美北中二年河合美紀

六ノ美北中二年鶴田やよい

竜海中二年天野雄介

六ノ美北中二年河合美紀

六ノ美北中二年鶴田やよい

竜海中二年天野雄介

六ノ美北中二年河合美紀

六ノ美北中二年鶴田やよい

六ノ美北中二年河合美紀

◆佳作岩津小三年加納千世

・四年犬塚恵美子

・五年山本政孝

・大山望

・学校賞岩津小学校

・連尺小六年竹川恵

・根石小一年廣川利哉

・矢作北小二年齊藤正幸

・矢作南小一年岩切啓子

・藤川小一年岸加奈子

・根石小一年廣川利哉

・矢作北小二年齊藤正幸

・藤川小一年岸加奈子

・根石小一年廣川利哉

・矢作北小二年齊藤正幸

・藤川小一年岸加奈子

・根石小一年廣川利哉

・矢作北小二年齊藤正幸

・藤川小一年岸加奈子

・根石小一年廣川利哉

・藤川小一年岸加奈子

・表紙写真
・カット
・表紙詩

羽根小
六ッ美中

朝岡良平
鈴木晴江
岡恵子



野畠町 金山公平氏蔵

炭火アイロン

現在では、どこの家庭にも一台は置かれている電気アイロン。その電気アイロンが日本ではじめて登場したのは、大正元年のことである。しかし、庶民の家庭に普及したのは戦後になってからとなる。

アイロンは、適度の湿気を含ませて熱と圧力を加えることによって、一定の形を相当期間保つための器具である。アイロンがいつ、どこで使われ始めたのか明らかではないが、アイロンの前身は、「火のし」であり、平安時代には「火のし」が原始的

アイロンとして登場している。さて、電気アイロン以前に普及していたのが、ここに紹介した「炭火アイロン」。この炭火アイロンは明治中期に現れるが、それよりかなり古く、江戸時代の天明期に、長崎の洗濯屋がこのアイロンを輸入して、初めて洗濯物にアイロン仕上げをしたと言われている。

岡崎学園の前身である岡崎裁縫女学校では、明治三十年代には和裁の実習において、こうした炭火アイロンが使われたといふことである。

オフシーズンを迎えるスポーツ界。しかし、その一方で、毎日走り続けている者もいる。先日の愛知県中学校長距離競走大会男子の部では、西三河から十校が出場し、うち八校が岡崎市内の中学校であった。また、女子の部においても、十校中五校が岡崎。岡崎の生徒たちの健闘ぶりが光っていた。

正月料理といえば、おせちを思ひ浮かべる。この「せち」とは節句の意味である。これが転じて節句に用いられる料理の意となり、今は松の内に食べる煮しめの名称になった。だから、田作り、ハム、数の子、伊達巻きなどではなく、芋、人参、焼き豆腐、大根などの煮しめが本物であるという。

シ
オ
ス
ア

スカートの裾をひらひらさせて学校に急ぐ我が母校の中学生。白衣襟カバードに白いネクタイ。數十年前に私が着た制服と同じままであると思うと、妙に懐かしい。布地も染めも今のように上等ではなかつたあの頃、スカートの折り目の表と裏の変色を気にしたものだ。それも懐かしい思い出である。

會田さんが登校拒否に陥ったきっかけは、学校の先生に一寸したことで叱られたことであり、思い遣りの心を欠いた先生の態度にあつたという。登校拒否児の心のうちを、先生方はぜひ見てほしい。どの子にも、必ず素晴らしい面がある。それを見付けてほしいと語る會田さんの口調に熱氣があつた。



*あるがままに	笠智衆
世界文化社	¥1400
*サムライマインド	森本哲郎
P H P 研究所	¥1400
*ついついの発言	山藤章二
講談社	¥1000
*言葉と沈黙	江藤淳
文藝春秋	¥1500

*ノーベル文学賞	柏倉康夫
作家とその時代 丸善株式会社	¥620

「文学は人類の理想に寄与するもの」。ノーベルの確固たる信念を受けて、ノーベル文学賞は、二十世紀幕開けとともに誕生し、今日「文学地平の拡大」をみる。民族、伝統、叙述形式を異にする世界各国の文学作品の価値をどのようにとらえ、どんな方法で選考するのであろうか。受賞までの経緯、選考の裏話、作者像、作品概略、作風、時代背景、影響力、貢献度等から、激動の時代に活躍した世界の文豪の生きざまと信念に感動を覚える。